

---

# 遥か遠き幻想郷

竜ノ介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遙か遠き幻想郷

### 【Nコード】

N5535P

### 【作者名】

竜ノ介

### 【あらすじ】

ある日、大森 海人は死んでしまう。それから神と名乗る幼女に出会い『暇つぶしに付き合え』と、言われて異世界送りに。送られた先で出会ったのは日陰の少女だった。

## 第一話 プロローグ 始まり。(前書き)

### 注意

本作は東方projectの二次創作です。

現実の本史に出てくる単語が出てきますが、この物語は『東方』の過去であり我々の世界の過去ではありません。

また、東方の世界設定やキャラクター設定も一部無視、改変している場合もございます。

この作品にはオリジナルキャラクターが出てきます。

基本的にご都合主義です。

時間が大きく飛んだりします。

ご感想、ご意見、矛盾・誤字の指摘などがございましたらご連絡ください。ただ筆者は非常に打たれ弱いので、なあなあでお願いいたします。

以上の事柄が了承できる方のみ、この物語をお読みください。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

## 第一話 プロローグ 始まり。

あ、これ死んだな。

そう思ったのは空手の試合中のこと。

幼い頃から自らの意思で道場に通い、高校でも何も考えずに空手部に入った。武道に憧れていたということもあるが、何よりも自分が強くなるのが楽しかった。

高校生活最後の試合。俺が所属する空手部はそれ程強くない。故に団体戦は2回戦敗退してしまった。しかし、個人の部では俺が優勝候補として挙がっている。

良くも悪くも俺は有名人だ。当然、残念なことだが、それに妬みを持つ者は多々いる。俺の対戦相手はそんなやつらの一人だった。何でもいいから俺を優勝させたくなかったのだろう。反則でもいいから怪我でもさせて棄権させてしまおう、そんな軽い考えだったはずだ。本来なら、そういう妨害は試合前に行われる物だが、俺は試合が始まるギリギリまで顧問と打ち合わせをしているから手が出せなかったのだろう。

そして試合中それは起こった。

相手の肘が喉に食い込む。

完璧に油断していた。格下の相手故に、規定外の行動に反応できなかった。

聞いたことのない、いや。聞きたくなかったゴリゴリという骨の

碎ける音が脳髄に響く。腕や足の骨折、脱臼程度は何度か体験したが、喉は初めてだ。

それと同時に“プツン”と何か大切な物が切れる音がした。成程、「命の糸が切れる」とはよく言ったものだ。この表現を考えた人は一度死んだことがある。間違いないね。

思いのほか力が入ってしまったって驚いているのだろうか？ 対戦相手の顔は驚愕に歪んでいる。周囲の観客はざわめき、審判は目を見開いている。

それからゆつくりと世界は回り、視界は天井だけになる。あ、そうか。俺は後ろに倒れようとしていたのか。

ボタン

視覚は天井以外映さない。

聴覚は誰かの叫び声を聞く。

嗅覚は赤錆の匂いを感じた。

触覚は何も感じない。

味覚は血の味以外しない。

ああ、俺は死ぬのか。五感がそれを告げている。

寒い、怖い、暗い。

どんどんと俺の意識は暗闇に落ちていく。

それで、俺は死んだんじゃないのか？

目を覚ますと見知らぬ天井……ではない。むしろ天井がない。上も下も左右も真っ白。どこまでも真っ白。驚きの白さ。

「ここは、天国？」

「いいえ、違うわ。まあ貴方が死んだには違いないけど」

声と同時に真っ白だった世界に人影が現れる。

その姿は幼い少女。金色の髪を腰まで伸ばし、未発達なその四肢は白色のワンピースに包まれている。第一印象は天使だろうか。しかし、その少女が放つ威厳は彼女が“普通”ではないことを証明している。

ああ、やっぱり俺が死んだのか。

少女は俺に大人びた笑顔を向けると、こう言い放った。

「おめでとう、あなたは神の暇つぶしに選ばれたのよ」

訳が分からない。暇つぶし？どういうことだ？

「訳が分からないという顔ね。まあいいわ、説明してあげる。私たちは暇なのよ。だから暇つぶしに付き合いなさい」

簡潔すぎる。つつこむ隙もない。それにしても“私たち”……か。神様は一人ではないのか。唯一神だと思ってた。

「神が複数いるとか、貴女が神だとかはどうでもいい。俺は死んだのだろう？早く成仏させてくれ」

未練のある俺が、自分の死を受け入れようとするのは辛い。成仏した先が何も考えなくていい楽園みたいな場所だといいなあ。

「ええそうね、その為にも暇つぶしに付き合いなさい。その後なら天国にでも現世にでもどこへでも連れて行ってあげるわ」

ピクリ、と反応する。現世にでも？つまりもう一度チャンスを得られるというのか。それなら話しは変わってくる。俺はまだ18歳だ、やりたいことはまだ沢山ある。恋したり、武を極めたり、ゲームしたり……まあ沢山だ。

「ああ分かった、付き合いおう。具体的には何をすればいいんだ？」

「ふふ、それでいいのよ。貴方には異世界に行ってもらうわ、ああ、これもある意味“現世”かしら？よかったわね。貴方の願いはもう叶うじゃない。それで場所は確か『東方』という世界だったかしら？」

現世という俺の願いはまだ口にしていない。相手は神様だから心が読めるのか？会話の必要ないか？いや、俺の態度からバレバレだったか？

まあいいや、ロリ神様の言葉を肯定する。確かに、二度目の生は俺が今までいた世界じゃなくてもいい。特別親しい友人もいない、両親は昔に他界している。この世界に固執するほど大切な物はなかったからな。何だ、このロリ神様の条件は俺に良いこと尽くめじゃないか？

「東方ってゲームのあれか？」

『東方シリーズ』 同人STGゲームとして発売されたソレは同人にもかかわらず脅威の知名度を誇り、その2次3次創作は星の数もある。

まあ、存在を知っているだけで詳しい内容までは知らないけどさ。曲とかいいよな！

「ええ、その東方ね。これは貴方たち人間の手によって作り出された物だけど、これだけの人が支援し、構想すれば、ソレはすでに人の手を離れて“世界”になりえるのよ」

確かに一つの世界になってもおかしく無いほど大勢の人間は関わっているだろうけど、胡散臭い。が、俺が死んでしまったのも確かだ。もう一度生を享受できるのなら贅沢は言わないさ。本当に東方の世界に行けるのなら儲けもの程度に考えよう。

「……良く分からないけど、俺はその東方の世界に行って何をすればいいのさ」

「さあ？それは貴方に任せるわ、普通に生活でもすればいいんじゃないかしら？」

「はあ？」

俺はついつい声を裏返らせてしまう。が、そんな俺を無視して口リ神様は話しを続けた。

「そうそう、向こうに行くに当たって貴方の能力を底上げさせてもらったわよ」



「能力？底上げ？」

「そう、貴方の能力は人間としては高い方だわ。でも所詮は人間。突然異世界に放り出されれば生きてはいけないでしょう？だから、貴方の能力を底上げさせてもらったのよ」

まあ確かに、突然異世界で生きると言われても困る。しかも、東方と言えば妖怪とか出てくるんじゃないか？そんな人外に俺の武術が効くとは思えない。第二の人生がすぐに妖怪に食われて終了とか目も当てられないしな。

「そうか、それは助かるな。具体的にはどういう風に底上げされたんだ？」

「身体能力の強化、魔力の付与、不老、才能の上限の撤回、全ての言語、文字の取得……それくらいかしら？ただ、普通の人間よりも多少強いレベルに設定したから、鍛錬は怠らない方がいいわね。人間相手なら兎も角、妖怪に当たると辛いわよ」

魔力とかはいいとして、不老って何だよ。俺は神の暇つぶしにいつまで付き合わされる予定なんだ。生き返らせてくれるのはいいのだが、いつまでも監視されているようで何か嫌だ。気になる。さり気なく聞いてみよう。

「ああ、まあ確かにチート過ぎててもあんた等の暇つぶしにならないしな。それで、不老にされたらしいけど、俺はいつまで暇つぶしに付き合えばいいんだ？」

「ふふ、分かっているじゃない………そろ

そろ時間のようね、それじゃ行ってもらっわ。精々私たちを楽しませて頂戴」

そう言い切ると、指パッチンをする。あれ？不老についての質問無視？

「はっ？・・・・・・・・・・・・・・・・うわわわわああああー  
—————」

突然の浮遊感の後、重力に引かれるように落下。

「そうね、飽きるまで付き合いなさい」

落下の中、そんな不穏な言葉を聞いた気がした。

「・・・・・・・・ぐあ」

尻から落ちる、尾？骨折れたかも・・・・・・・・。

くそ、あのロリ神様め。今度あったらお菓子とか上げるから覚えとけよ！俺は紳士だから幼女に優しいのだ。

悪態？をつきながら、周囲を確認する。

時代を感じる石造りの埃っぽい個室。部屋には机、椅子、ベッド、本棚の必要最低限しか置いていない。後は尻の下にある謎の魔法陣と

目の前にいる女の子。

フワリと腰まで伸ばした髪は紫色、その頭の上には帽子　ZU  
N帽　が乗っていて。その服装は紫と薄紫の縦ストライプのワン  
ピース、その上に薄手で薄紫色のコートのようなものを上に羽織っ  
ていた。

幼さの残るその顔立ちは恐ろしい程知的に整っていて、その大き  
な瞳は宝石のよう。

しかしその体の線は、病的とまで言わないが服の上からでも分か  
るくらいに細い。触れただけで壊れてしまいそうなほど儚く、それ  
に合うように肌の色も白い。不謹慎だが、こんな無骨な部屋ではな  
く病室の方がよく似あいそうだ。ついでに胸も身長もない、中学生  
くらいか？

そんな少女は、目を見開き俺を見ている。

取りあえず声かけてみようか。こんなシチュエーションに相應し  
い言葉は……………。

「えつと……………貴女が俺のマスターか？」

## 第一話 プロローグ 始まり。（後書き）

この物語の後書きは、『ひぐらしのなく頃に』や『うみねこのなく頃に』などでいうTIPSや、読者様からの質問などに答えるスペースにしようと考えております。故に、この物語は後書きも含めて本編である。と考えてもらって結構です。

次回から、名前が出てきたキャラクターは後書きを用いて紹介させていただきます。

本来なら、ここもTIPSを入れていきたいのですが。プロローグの後書きで長々としてしまうのも何なので、とりあえず一旦筆をおかせていただきます。

## 第二話 雇用（前書き）

やはり異世界物なので、始めの方は説明が多くなってしまふ・・・。

## 第二話 雇用。

SIDE パチュリー

使い魔が欲しい。

最近、魔法の基礎も身につけてきたし、マジックアイテムの作成にも段々慣れてきた。そろそろ使い魔でも召喚して、雑用の全てを任せて魔法の習得に力を入れてもいい頃ではないか？

私はそう考え、使い魔召喚の為に自室の床に魔法陣を描く。  
後はこの魔法陣に魔力を込めるだけ……なのだが。

「えっと……貴女が俺のマスターか？」

突然目の前に青年が現れた。私は思わず目を見開いて、彼を凝視してしまう。

年齢は私より少し上だろうか？珍しい黒色の髪の毛で、ファッションというより邪魔だから切りましたというイメージだ。しかしそれは彼の整った顔によく似あっている。

服は全身黒色。上は黒色の長袖Tシャツ1枚、下は黒色のジーパンを穿いている。ブーツのようにシッカリとしたその靴まで黒だ。身長は座っているからよく分からないが、170前後だろうか？

私はまだ魔法陣を発動させていない。つまりこの青年は私の魔法と関係なしに現れたということになる。その上魔力の残滓も感じられない、だから転移魔法ではない。彼は魔法も使わずに私の前に突如出現したことになる。

だが、青年は私を“マスター”か？と聞いてきた。人間のように

見えるが使い魔なのだろうか？私が知らず知らずのうちに魔力を魔法陣に流してしまい、中途半端に召喚してしまった？

いや違う。青年と私に魔力のパスは通っていない。つまり彼は私の使い魔ではない証拠だ。

だが、青年からはそれなりの“力”を感じる。魔力も普通の魔法使いより感じるし、それ以外にも何かあるようだ。それに魔法陣を見ても何も反応しないということは『魔女狩り』の連中でもない。

魔女狩りでもなく、魔法使いでもないならこの青年は一体……？

何はともあれ何時までも固まっている訳にはいかない。話しかけてみよう。

「……私の名前はパチュリー、パチュリー・ノーレッジ。パチュリーでいいわ。貴方は？」

「俺は大森 海斗、俺のこと海斗でいいよ」

言葉は通じるようだ。

青年は座りながら私に微笑む。その笑顔があまりに輝いて見えて少し顔が熱くなるのを感じた。男性とまともに話したことなかったから、仕方がないといえばそうかもしれない。

対応を見るに敵意はない？いやまだそう決めるのは早計だわ。自衛の為に何かの隙を見て、居間に置いてあるマジックアイテムを数点持ってくるのがいいわね。

「そう、じゃあカイト。唐突だけど貴方何者？」

回り道しても仕方がない。取りあえず直球で聞いてみるに限る。

SIDE 海斗

「そう、じゃあカイト。唐突だけど貴方何者？」

パチュリーは目を細めて俺に問う。何故か顔が照れたように少し赤い。

どうしよう、まさか『死んだら神様にこの世界に放り込まれました』なんて言えるわけがない。正気を疑われるのが目に見えている。いや、逆に正直に話した方がいいのか？まだ会ったばかりだから確証は出来ないけど、彼女は頭が切れるタイプみたいだ。下手な言い訳をするとうる覚えにバレてしまうだろう。それに頭が切れるからこそ、俺が嘘を言っていないことが伝わるのではないか？

よし、正直に話そう。俺は腹筋に力を入れて覚悟を決める。信じてくれなかったらどうしよう……。

「実は、俺にも良く分からない。ことのあらましを始めから説明したいが、長くなるけどいいか？」

「そう、ならその椅子に座っていて。お茶でも出すわ。私が戻るまでに話す内容を纏めといてね」

そう言うのと、足早にパチュリーは部屋から出ていく。

突然現れた見知らぬ男を一人にすると、危機感がないのか、肝が据わっているのか……。まあ結果的に俺は何もするつもりは無いから問題ないのだけどさ。



ふう、でもまあ確かに纏める時間があると助かる。まだ俺も混乱してるしな。

「そういえば」

自分の体を見る。正確には自分が身に着けている物だ。

確か俺は胴着のまま死んだはずなんだが、何故か私服になっている。ご丁寧に靴まで履かされていた。ロリ神様が着せてくれたのかな？

取りあえず立ち上がって、椅子に座ろうと歩き出す。

「お？」

体が軽い。精神と時の部屋から解放された気分だ。これはロリ神の言っていた身体強化の影響か？

これなら、普通の武術と言わずに格ゲーの技とか再現できそうかも。すぐにでも試したいが、初対面の人の家で暴れる訳にもいい。

才能の限界の撤回とかも言っていたな、つまり鍛錬すれば鍛錬するだけ強くなれるのか？魔力とかと共に追々確かめて行こう。

そういえば外国人っぽい出で立ちのパチュリーと会話できたのも全ての言語を取得しているお蔭なのかな？知らない言葉が耳から入ると、頭で勝手に変換してくれた。十中八九取得しているお蔭だろう……。

椅子にどっかりと座りながら、ふっと思う。この部屋に椅子は一つしかない。パチュリーはベッドに座るのだろうか？まあ確かに初対面の男をベッドに座らせる女の子はいないよな。

「はあ、こんなことなら東方の設定を調べておけばよかったかな」

小さな溜息を付く。まあこんな事態を予想できる訳もないのだから仕方がないのだけど。正直、東方は音楽しか知らない。キャラや設定などまったくもって無知である。妖怪のことは友人から聞いた。もしかしたらパチュリーも東方のキャラクターなのかな？

「……………混乱のせいかな、さつきから思考が挙動不審だ。次から次へと疑問や判明事が増える。そろそろ一旦落ち着いてパチュリーに話す内容考えないと。」

「淹れてきたわよ」

すると、俺の思考を読んだかのようにパチュリーがお盆を持って帰ってくる。早！まだ何も纏めてない。

パチュリーはベッドにお盆を置いてから、紅茶を俺に差し出す、俺はそれに礼をして受け取った。

そしてパチュリーはベッドに腰掛けて、自分の分の紅茶を飲む。

「それじゃ、聞かせてもらえるかしら？」

仕方がないから行き当たりばったりで説明することにした。

少年説明中。

「……………と、いう訳なんだが」

空手の試合中に死んだところから、ロリ神様に肉体改造され、今ここにいてここまでを詰まり詰まり説明した。

当然この世界がゲームであることは伏せる。さすがに自分がゲームのキャラだとは知りたくないだろう。俺だったら知りたくない。

「神とか異世界とか俄かに信じられないけど………嘘を言っているようには見えないわね。でもその話し他の人にはしない方がいいわよ。私だって貴方が突然目の前に現れなければそんな話し信じられないもの」

「ああ大丈夫だ、俺も自分で信じられないよ」

そう言っ て肩をすくめて見せる。

「それで、私のことをマスターと呼んだのは何だったの?」

「雰囲気?」

パチュリーは俺に訝しげな視線を向けた後、小さな溜息を付いて仕切り直す。どうやら聞かなかったことにするらしい。

「確認するけど貴方は異世界からこの世界にやって来たのよね?」

パチュリーの問にコクリと頷く。

「それで、貴方は神様からそこら辺の人間より強い程度の力を貰ったのよね?」

「ああ、死ぬ前より体が軽いから間違いないと思う」

確認するようなパチュリーの台詞に回答していく。

「他にも色々聞きたいことはあるけども、取りあえず貴方はこれからどうするの？」

悩む。ロリ神様は『普通に生活しろ』と言っていたが、それはつまり生きていれば大丈夫ってことだろ？修行して、恋して。ゲームは無理かなあ・・・あ、でもこの世界そのものがゲームのようなものか？

「分からない。ココには知り合いもないし、明確な目的もない」

「そう、それなら当面はうちに泊まりなさい」

え？早くも目標の一つである恋愛フラグ？まあ俺に限ってそんなことはないだろうが。

「いいのか？」

「ええ、ただ三つ条件があるの」

パチュリーは待ってましたと言わんばかりにニヤリと笑いながら、指を三本立てて言う。

条件？余程のことではない限り飲もう。正直ここを追い出されたら路頭に迷うしかない。

「一つ目は家事をやってもらうわ、私も多少はするけど、基本的には貴方にやってもらうわ」

うん、問題ない。多分パチュリーのする多少の部分は自分の衣服

の洗濯とかかな？料理は出来ないから要相談だ。

「二つ目は無断で私の部屋に入らない」

まあ普通無断で女の子の部屋には入らないだろう。俺はそこまで非常識ではない。

「最後の三つ目。ここにいる間、貴方に私の護衛をしてほしいの」

「護衛？」

「そう、護衛。貴方ここに来る前ラテとかいう格闘技やっていたのでしょう？それに神様から貰ったっていう力もある。それで私の護衛をしてほしいの」

「それは構わないけど、護衛というには君が何か危険な目に合うことがあるのか？妖怪とかか？」

「妖怪は街中には滅多に現れないわ、主には他の魔法使い。私は魔法使いなの。魔法とは学問だわ、魔法の研究成果を奪いにくるコソ泥みたいな魔法使いが存在しているのよ」

魔法使い……。か。本当に異世界に来てしまったんだな。実はドッキリでこの娘はただの電波ちゃんであれば話は別だが……。いやただの一介の高校生にこんな大がかりなドッキリ仕掛けて誰が得するんだ。やっぱりここは異世界か。

対魔法使いからの護衛、危険すぎる仕事だ。だがここで断れば宿を失い路頭に迷う。なによりも女の子一人守れないという烙印が押されてしまう。それは嫌だ。

「つまり、俺はそいつらを追い返せばいいのか？」

「そうね。本来は貴方が足止めしているうちに私が魔法で撃退するのがいいのだけれど、派手な魔法なんて使ったら『魔女狩り』の連中に見つかってしまうわ。今までは攻撃用のマジックアイテムを使って、その衝撃を外に出さないように防壁を張るなんて効率の悪いことをしていたのよ」

今の話しで気になることが二つあった。

まず一つ目。

「魔法は一度に一つしか使えないのか？」

そうだ、防壁を張りながらマジックアイテムを使うということは、防壁を張りながら攻撃魔法は使えないと言うことか？

「ええそうね。どんな魔法でも頭を複雑に使う必要があるわ。それを二つ同時に行うのは並みの魔法使いには不可能だわ、それこそ思考が二つ以上完璧に確立しているような人でないと」

ふむふむ、成程。確かにそれなら俺が護衛する意味は大いにある。

それで二つ目は。

「そうか。そう言えばさつき魔女狩りって言ったよな？それは怪しい奴を片っ端から処刑していくアレか？」

魔女狩りって確か15世紀くらいだったよな？東方の世界だと違

うのか？いや、そもそも東方の話しは日本じゃないのか？魔女狩りはヨーロッパだったはず……。当面の目的はそこら辺を調べることに、この世界に慣れることだろうか。

「その通りよ、貴方の世界にもあったのかしら？」

コクリと頷く。

「今すぐに魔女狩りの連中に見つけることは無いのか？」

「ええ、この家と私には認識阻害魔法をかけているから、下手なことをしなければ見つからないはずよ。まあ魔法とは関係なく外を歩いていて、魔女狩りの目に付いて処刑される可能性はあるけど」

皮肉気にパチュリーが言う。

魔女狩りか、昔歴史の授業で聞いたときも胸糞悪い話だったが、実際にその脅威に晒されている人を目の前にすると怒り狂いそうになるな。だってそうだろう？兵隊が『あいつ怪しくね？』って言ったら即火あぶりだぜ？これで数百万人が犠牲になったって言うのだからどうしようもなく愚かな話だ。

「認識妨害魔法って？」

「認識妨害魔法とは、まあ簡単に言えばこういうことよ」

言つと同時にパチュリーの髪の色が茶色に変わる。なるほど変装の魔法ってことか。髪の色が変わったということは、やはりパチュリーの髪の色は珍しいのだろうか？

「ありがとう良く分かった。まあそういうことなら仕方がない、その三つの条件なら飲もう。だが、残念ながら俺に料理のスキルはないよ。毎日三食消し炭でいいなら提供できるけど……」

「そう、なら料理は私がするわ。でも私が食事をとらない時は自分でどうにかしてね」

「なら契約成立だ、これからよろしく頼むよ、パチュリー」

俺はパチュリーに右手を差し出す。すでにパチュリーの髪の色は戻っていた。

「ええ、こちらこそよろしくお願いするわ、カイト」

パチュリーは右手で俺の右手を握ってしっかりと握手する。

俺とパチュリーとの生活は、こうして始まった。



## 第二話 雇用（後書き）

### TIPS

登場人物紹介。

大森 海人 おおもり かいと

髪の色 黒。

瞳の色 黒。

顔 それなりにイケメン。

イメージカラー 黒。

18歳

物語の主人公。

空手を習っているが、武道全般が好きなので他は我流だが使える。

ロリ神様から付与された能力は、身体能力の強化、魔力の付与、才能の上限の撤回、全ての言語、文字の取得となっている。

身体能力の強化と格闘技のおかげで人外とは言わないがそれなりの戦闘能力を誇る。才能の限界の撤回により今後の鍛錬次第では更に化ける可能性も秘めている。

程度の能力は『神から力を与えられた程度の能力』になるのだから？以降思いつき次第付与してしまうかも。

パチユリー・ノーレッジ

髪の色 紫。

瞳の色 紫。

顔 現代なら街を歩くだけで誰もが振り返るレベルの美少女。しかし、本人の自覚はない。

イメージカラー 紫。

14歳。

生まれた時から魔法使いであり、人種魔法使い。その為に不老。

魔法に関しては天性の才能と程度の能力により、同い年はおろか、ベテランの魔法使いにも等しい力を持つ。

程度の能力は『火＋水＋木＋土＋金を操る程度の能力』本来は更に日＋月があるのだが、筆者が日と月ってどんな魔法やねん？と言った為、修行不足で開花していないという設定になりました。

### 第三話 マジックアイテム。(前書き)

本当はこの話の冒頭は前話に入れる予定でしたが、前話はどうしてもあの場面で切りたかったので、無理やり今話の冒頭に差し込みました。ちよつと無理やりだったかもしれませんが。

部屋の間取りの描写が難しい……挿絵とかで挿入したらいいのでしょうか？

### 第三話 マジックアイテム。

あの後、パチュリーに俺が寝泊まりする部屋に案内してもらった。パチュリーの家は、リビング&キッチン、パチュリーの自室、両親の部屋の三部屋構成。風呂とトイレは別にある。になっっている。俺の案内された部屋はパチュリーの部屋の隣にある彼女の両親の部屋だ。

パチュリーの両親は三年前に魔女狩りで殺されたそうだ。彼女の母親は彼女に似て美人だった。故に貴族は無理やり彼女の母親を連れ去ろうとし、そのときに魔法を使って抵抗してしまい魔法使いだったのが判明してしまった、父親はそれを止めようとして『魔女の仲間』としてその場で切り殺されたらしい。

母親は“後日”火あぶりにされた。美人だったパチュリーの母がその空白の時間に何をされていたかは想像もしたくない。

パチュリーはその時、現場にいなかったたので難を逃れたそうだ。それを聞いて俺の怒りは臨界点に達しそうになったが、それを話すパチュリーの手が握りすぎて白くなっているのを見て、それを飲み込んだ。彼女が怒鳴り散らさないのに、俺が代わりにする訳にはいかないだろう。

他にも色々詳しく話を聞きたかったが、思い出さなくなさそうな過去を無神経に穿り返すことも出来なかった。

まあそれで、そんな大事な両親の部屋を俺が使っているのかと聞くところ、『あら、じゃあ貴方は私と一緒に寝るの?』と笑いながら言われてしまった。そう言われると反論できない。是非!と言いかけたのは秘密だ。誰だって、こんな可愛い女の子に言われたら是非って言いたくなるよ。多分。

パチュリーの両親の部屋も彼女の部屋のように簡素だった。二つのベッドに本棚と机くらいしか置いていない。

すでに日は落ちていて夜になっていたこともあり、複雑な思いだったが俺はそんな部屋で一晩すごした。

朝。

真っ白な空間ではなく、今度こそ見知らぬ天井が広がっていた。ベッドからのつそりと起き上がる。

すぐに頭は回転を始め、昨日の出来事を思い出す。あ、そうか。パチュリーのところにお世話になったんだっけ。

「……パチュリーから水の出る場所聞いてなかった」

顔が洗いたい。場所が分からない。でも台所は水出るか。取りあえずの方針は決まった。

立ち上がり、木製の扉に手をかけて開く。

「あら？おはよう。早いね」

この部屋を抜けるとすぐそこはリビングと台所が併合されている部屋に出る。出たらすぐにパチュリーに声をかけられた。

「ああ、おはよう。そういう君も早いんだな」

パチュリーは台所でパン生地のような物をこねこねしている。昨日と同じ紫の衣服の上に白色の簡素なエプロンをしていた。

「ええ、朝ご飯を作らなくてはいけないしね。昨日突然現れた居候さんの分も作る必要があるわ」

パチュリーはそう言うところコロコロと笑い、俺はそれに苦笑いで返す。

「そつえば、水が出る場所あるかな？顔を洗いたいんだけど」

「それなら、脱衣所にある水道を使えばいいわ」

そう言うつとパチュリーは俺が立っている位置から机を挟んで反対側にある扉を指した。

水道？水道が通っているのか？  
半信半疑で脱衣所へと向かう。

「……確かにこれは水道だな」

それは見慣れた洗面台。鉄が木に変わっている程度はあったが他はまったく同じ。

捻りを捻れば水が出る。まあ当然だが釈然としないなあ。

取りあえずジャバジャバと顔を洗う。拭くものがなかったから仕方なく服で顔を拭いた。

「なあパチュリー、あの水道どういう原理なんだ？」

「変なことを聞くわね、あれは水の魔法が込められたマジックアイテムよ。まあ確かに高価な物だけど、私は魔法使いだから自作したわ。便利でしょ？」

ふつと見れば台所には冷蔵庫もあるし、コンロもある。明らかにこの建物の雰囲気と合っていないのだが。冷蔵庫は氷のマジックアイテム。コンロは火のマジックアイテムだそう。拳句の果てにはお風呂の湯沸しや掃除機のマジックアイテムまであるらしい。

ちなみに脱衣所で手を叩くと風のマジックアイテムが発動して乾燥してくれるそう。服で拭く　ダジャレではない　必要はなかったのな。

それらは一般家庭には置いていないが、貴族の屋敷には標準装備されている物らしい。魔法使いは駄目で、マジックアイテムは良い。魔女狩りの基準が分からん。便利な物なら許すのだろうか？チリチリと胸の奥からまた怒りがこみ上げるが頑張つて平静を保つ。

話を切り替えよう。

「あ、そう。少し広いスペースはあるか？朝の鍛錬をしておきたいんだが」

これは生前からの俺の毎朝の日課だ。

本来はそれの前に走り込みをするのだが、俺はまだ道を知らない。このまま走り込みに行ったら帰ってこられない自身がある。

「それなら裏庭を使って構わないわ。そこにある勝手口から出たらすぐよ」

パチュリーは俺の部屋の右側にある扉を指す。

「あんまり派手なことしないでね？朝ご飯が出来たら呼びに行くわ」

「ああ分かってる、ありがとう」

そう言い残し、俺は勝手口から裏庭へと出た。

そこは家の敷地と同じほどの広さがあつた。一般家庭としては庭に面積を取りすぎな気がするが、ここで魔法の実験とかするのだから？まあ鍛錬するには丁度いい。

ついでに外の様子も分かればよかったのだが、高い生垣に覆われていて外の様子を知ることが出来なかった。

「…………ふっ！…………はっ！…………やっ！」

普段は自分で作ったオリジナルの型をこなすだけなのだが、今回は身体能力の強化がどれほどの物か確認するためなので、適当に技を繋いでいく。

突き、回し蹴り、裏蹴り、サマーサルト、掌底、竜巻旋風脚、真空片手ゴマ。

本当に格ゲーの技出来た。俺すげえ。

「すごいわね」

俺は勝手口から出てきたパチュリーの声に動きを止める。いつか



ら見ていたのだろう？少し恥ずかしい。

「そついえば貴方、魔力も持っているようだけど、魔法は使えるの？」

ああそついえばあのロリ神様魔力の付与もしたんだっけ。

「いや、使えない。魔法なんてこっちに来て初めて見たよ」

まだマジックアイテムと認識阻害魔法しか見てないけどな。

「そつ、なら後で簡単な物を教えるわね、折角ある魔力が勿体ないわ。今はご飯を食べましょう、冷めてしまっわ。あ、貴方はご飯の前に汗を流しなさいね」

そつ言い残すとパチュリーは勝手口から戻っていった。

魔法を覚えてくれるそうだけど、俺も魔法使いになれるの？魔法拳士とかになれるの？ちょっと嬉しい。カッコよくない？魔法拳士だがその前にメシだ。その前に言われた通りシャワーを浴びさせてもらおう。ついでに乾燥のマジックアイテムも気になるしな！

俺もパチュリーの後に続いて勝手口から中へと帰った。

「うまい」

シャワーを浴び、乾燥の魔法を堪能 手を叩いた瞬間体と髪が一瞬で乾いた、魔法すげえ した後、パチュリーの用意した朝食

をとる。

食卓には焼きたてのパンにベーコンエッグ、それとコーヒー。ベーコンエッグの方は生前も何度か食したことがある。が、これは別物だ。パンも店で買うよりもおいしく感じる。コーヒーも後味がスッキリしていてブラックで飲んでも大丈夫だ。

俺の両親は中学生の頃に事故で他界している、蓄えがそれなりにあったので俺はソレ以降一人暮らしをしていたのだが、基本的には惣菜などを買って食っていた。それは、俺が料理をすると炭が大量発生する為の苦肉の策だ。

それ故に人の手が入った暖かい物を口にするのが久しかった。うまく感じるはずである。

「そう、それはよかったわ」

パチュリーは口では素っ気なく言うが、顔は笑顔である。可愛い。

「ねえカイト。朝食が終わったら買い物に付きあってももらえるかしら？」

「んあ？べふおにふあふあなふあいふえど、ふあにかふんふあ？（別に構わないけど、何買うんだ？）」

パンを口に詰めながら問う。パンうまい。

「飲み込んでから喋りなさい。えっとね、さっき貴方の鍛錬を見て思ったのだけれど、貴方の“戦力”は宿と食事代を差し引いても十分に御釣りがくるレベルなのよ」

さっきので伝わっていたのか、さすがパチュリー。

俺はゴクリと口に詰めたパンをコーヒード喉に流し込んでから口を開く。

「御釣り？」

「そう、正直私は貴方の戦力をあまりあてにできなかったわ。でも、貴方の実力の片鱗をさっき見せてもらったでしょ？それで貴方レベルの護衛を雇うには、かなりの給金がいると判断したのよ」

「俺はそんなに凄いのか？」

「ええ、少なくとも片手でグルグル回る人を私は見たことないわ。あの運動能力を見せれば大概のところは雇ってくれるんじゃないかしら？」

ああ……真空片手ゴマのことか。確かにあれはロリ神様の強化が無いとできない技だな。

「ふーん。俺は別に給金なんていいぜ？パチュリーには良くしてもらってるし」

パチュリーには一泊の恩義がある。異世界に来て初めての一泊の恩は大きい。それに彼女と話すことで色々なことも分かった。多少のただ働きは許容範囲だろう。

「そう言ってもらえるのはありがたいのだけど、それじゃこっちの気が収まらないわ。だから貴方にプレゼントをしようと思って」

「プレゼント？」

「色々考えたのだけど、認識阻害のマジックアイテム何て今の貴方は必要でしょ？それを貴方に贈ろうと思ったのよ。でも、認識阻害のマジックアイテムは体の面積を多く隠せる必要があるの、基本的には服ね」

そこまで言われると、流石の俺もピンとくる。

「暫くの報酬の代わりに、一緒に買い物に行って俺が気に入った服で認識阻害のマジックアイテムを作ってくれるってことか？」

パチュリーはコクリと頷く。

「まあ、貴方の服以外にも消耗品の買い足しもあるわ。貴方は荷物持ちの役割もあるのよ」

パチュリーはそういうと意地悪そうな微笑みを俺に向けた。照れ隠し？

正直助かる。本当は俺が認識阻害魔法を覚えたら早いんだけど、物覚えの悪い俺が完全に使いこなすのに何ヶ月いや、何年かかるか……。

かと言っていつまでも家に引き籠っている訳にもいかないだろう。パチュリーの護衛だつてある。だが認識阻害魔法もなしに外に出かけると、パチュリーを基準に考えて、明らかに東洋人な俺の外見は目立つだろう、魔女狩りに会う確率が高い……。だから俺は認識阻害のマジックアイテムが必要だ。

その上、元々高価だというマジックアイテムの作成なのだから、給金としては十分でパチュリーの気も収まると。

「そうか、それなら買い物にお供させていただきます」

こうして、二人で買い物に行くことになった。

### 第三話 マジックアイテム。（後書き）

大切なお知らせがあります。残念ながらこの話で書き溜め分が終了してしまいました。本来の予定では20話ほど書いてから投稿する予定だったのですが。何分処女作品です。矛盾点や誤字を探して十、二十と繰り返し読んで読むうちにゲシュタルト崩壊を起こしてしまつて、矛盾を矛盾だと判断できなくなつてしまつたのです。

物語がかなり進んだのち、始めの方に矛盾が生じてしまつた場合物語自体が破たんしてしまうのではないか？と思い見切り発車させていただきました。

ぶつちやけてしまうなら。自分では矛盾発見できなさそうだから読者様に見つけてもらおう！という甘い考えです。ごめんなさい。石を投げないでください。

さて。上記の事柄から初日から更新速度が落ちると言うご報告をさせていただきます。目標では最低1週間に1本。もしくは出来次第の投稿になります。

#### T I S P

パチュリーの母親について。

このキャラクターは原作にいないオリジナル設定です。

パチュリーのお母さんは母親として優秀でしたが魔法使いとしては駄目駄目です。防壁は脆く、認識阻害も見破られやすい。そんなだから捕まつてしまったのですね……。

感想への返信及び修正。

投稿してからこの短い時間で何と感想をいただいてしまいました。筆者は驚きのあまり全裸で雄たけびを上げるといふ奇行を行う……

・には至ってませんが、それに近いほどの驚きです。1通も来ないと思ってました！

さてそのご感想に書かれていたのですが、2点ほど質問がございました。

1つ。ロリ神様は自分が干渉するでもなしに、どうやって暇つぶしをしているか？

これは単純に干渉ではなく鑑賞しているのです。我々がドラマやアニメを見ている感覚と同じと言えば伝わりやすいでしょうか？実は海人の他にも、異世界入りを果たしている人は沢山います。そうです他のSSの方々です。ロリ神様筆頭の他の神様はそういうのを見て暇を潰していらっしゃるのでしょうか。

2つ。パチュリーが14歳とありましたが、作中の時間軸は現代よりずっと昔なのでしょうか。

答えはYESです。本来の予定ではレミリアが物語に介入してきってからTIPSで書く予定でしたが、今書いてしまっても問題と判断したため答えさせていただきました。東方の本編より500年とちょっと前です。レミリアが生まれているかどうかは今だ考え中。

さてそうなるとおかしいのはパチュリーの年齢です。東方の設定ではパチュリーは100歳となっています。ですが上記のことを考えると東方本編では500歳を超えています。これはどうしたことでしょうか？それは作者が本編の設定がガン無視したためです。何故そんな暴挙にでたのか？それは私がこの物語を描き始めた切っ掛けが『レミリアにお兄様と言わせたい』だったからです。そのため、言わせるには、幼少期から一緒にいるのが言わせるための近道だろ考えました。そのためパチュリーには東方の過去という世界観の説明役という形でかなり早く生まれた設定にしました。

東方本編の設定を大事にしている方、ごめんなさい。

そして、前話のTIPSで書かせていただいたパチュリーのキャラ設定にあった『程度の能力』について修正させていただきました。パチュリーが今使えるのは火・水・木・土と書かせていただきました。それで五行のはずなのに金がないとバランスが悪いと感想をいただき改めてこれを見させてもらって確かにバランスが悪い。

何故筆者はわざわざ金を抜きバランスを悪くしたのか？それは単純に火・水・木・土の木を風と読み間違えていたからです。4属性で丁度いいやん？という安直な考えで金を抜いたのですが、五行と気が付いた今は。金いるやん……。とっています。ので、前話の後書きのその部分を微修正させていただきます。凡ミスですみません。教えてくれて感謝の極みです。

金は五行を形成する一要素で、文字通り金属の類に関する魔法だと思われます。

（水銀をモチーフにした弾幕や歯車を象った弾幕もありましたが）ということも教えていただきました。多謝。

しかし、金属の類……。投影？アンリミテッドブレードワークスとか使えてしまうのでしょうか？この紫もやしさんは。うゝむパチュリーさんのキャラ的に使いにくい属性なのかもしれません。

そろそろ本編よりも後書きの方が長くなってしまっているのでは？という懸念が出てきましたので筆を置かせていただきます。感想をくれた方にこの場を借りて改めて、返信と感謝の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございます。



#### 第四話 デート？／E：認識阻害コート。（前書き）

今回の話も説明が多くなっています。筆者も目を皿にして矛盾探しをしています。まだ確認漏れがあるかもしれません……。魔法とか異世界題材だと矛盾が一杯！……。ふう。でも自分の知らない世界は書いて楽しいです。

#### 第四話 デート？／E：認識阻害コート。

朝食が終わり片付けが終わると、俺とパチュリーは街へと出ていた。

「あの、パチュリーさん？」

「な、なによ」

「どうしてワタクシと腕組みを？」

今、俺とパチュリーは腕組みをしている。俺の腕にはまだ硬さが残るも柔らかな双丘の感触がががが。

「しょ、仕様がないでしょ！貴方にも認識阻害魔法かけるには私と触れている必要があるのだから！！」

そう言いながら“茶髪”のパチュリーの顔は真っ赤に染まる。

俺にも認識阻害魔法をかけることは予想してたけど、まさかこんなことになるとは。役得役得。

腕組みじゃなくて手を繋ぐだけでもいいんじゃないか？と聞いたら『そっちの方が恥ずかしいじゃない！』と言われた。そんな物なのか？

そんなやり取りをしているうちに街の中心部にある市場へと着いた。ちなみにパチュリーの家もこの中心付近にある。町はずれの方がいいんじゃないか？と聞いたら『木を隠すなら森でしょ？』と返された。ごもつとものです。

「あら、パチュリーちゃんおはよう。隣にいるのは恋人かい？」

急におばちゃんに話しかけられた、どうやら八百屋のおばちゃんらしい。

「ちつちちち、違いますよ」

赤かった顔を更に赤くしてパチュリーは否定する。

俺？俺は恥ずかしがるどころか誇りたいね。だってパチュリーみたいな綺麗どころと腕組んで歩けるのだから。

「そうかい？パチュリーちゃんが珍しく男と一緒に歩いていて、しかも腕を組んで歩いていたらさっき」

そう言いながらもおばちゃんの顔はニヤニヤしている。この顔は絶対信じてないな。

その顔をキリリとして俺に向けて言った。

「あんだ、パチュリーちゃんを不幸にしたら承知しないからね」

「はい、任せてください」

笑顔で俺は返す。前もって断っておくが俺とパチュリーはそんな

浮いた関係ではない、そもそも昨日出会ったばかりだ。それで恋仲になれるほど俺もパチュリーも軽い人間ではない。まあ緊張したり赤面したりはするけど……。

ここで俺が肯定してみせたのは、肯定した方が話しが短く済むと判断したからだ。

腕を組んで歩くというのは意外と体力を使う。ただでさえ体力の無さそうなパチュリーはそれに加え魔法も使っているのだから消耗も早いはず。そんな俺の考えが伝わったからこそ、俺の腕を取っているパチュリーも顔を真っ赤にさせながらも反論しないだろう。

その後も適当に消耗品を買い集める。その間も周囲に囃し立てられ、その度パチュリーは顔を赤くしていった。そして、囃し立てる全ての人に八百屋のおばちゃんと同じことを言われ、同じ言葉を返した。すでに俺とパチュリーの仲は市場公認みたいになっている。むむ、さすがにパチュリーの為にも誤解を解いた方がいいか？ いや、まあ本人が何も言わないのだから大丈夫なのだろう。

「それにしても意外だな」

「何がよ」

少しすね気味のパチュリーが返事を返す。腕を組んでいることと身長の関係でパチュリーは上目使いになっている。

「いや、パチュリーは人ともっと距離を取るタイプだと思っていたからさ」

「そうね。今ではそうだわ。でも彼らは私がこうなる前……  
両親が亡くなる前からの付き合いなのよ。昔の私はもっと明るかつ

「だから」

腕を取る手に力が入る。その結果、俺の腕がパチュリーの双丘にさらに食い込むのだがそれを気にするような雰囲気ではなかった。

「そつか　　お、ここじゃないか？服屋って」

話を切り替える為に明るめに言う。今度からはもっと話しを慎重にふらないとな。

「ええ、そうね」

俺とパチュリーは服屋へと入った。腕に入った力は元の強さにもどっていた。少し勿体なかったかな？

今、俺はパチュリー家の居間で昼食を食べている、ダジャレではない。

結果として服屋で俺は、薄手で黒色のロングコートと替えの着替えを数点　全部黒　購入した。本当は服屋で何かイベントがあったらよかったのだが、何事もなく購入し、何事もなく帰宅したので割愛させてもらった。

「それで、どうやってそれをマジックアイテムにするんだ？」

机を挟んで対面する形で座ってパンを千切って食べているパチュリーに、彼女の横に置いてあるコートを指して言う。

「簡単よ、このコートに認識阻害の魔法を掛ければいいの。ただ普通に掛けるよりも数倍強く掛けなくてはいけないけどね」

それを皮切りに『丁度いいわ』と魔法とマジックアイテムの違いを教えてくれた。

マジックアイテムは一度魔法を込めるとほぼ永続的にその魔法が使える。これだけ聞くとマジックアイテム最強に聞こえてしまうがそうではない。まずマジックアイテムは作るのに相当量の魔力が必要になる。これはその物に魔法が定着するまで魔法を掛け続ける必要がある為だ。

次にマジックアイテムに付与された魔法は、普通に魔法を使うよりも劣化する。今回の認識阻害魔法を例にあげると、パチュリーはこのコートに体の骨格が変わって見えるレベルの魔法を掛けるらしい。が、実際に現れる効果は髪の色と人相を少し変えて見せる程度でしかない。

攻撃魔法などはそれが特に現れるそうだ。人を一瞬で炭に出来るレベルの炎魔法をアイテムに込めても、ライター程度の火力しか発揮できない。攻撃目的ならば魔力自体をアイテムに込めて爆発させた方がよほど攻撃力があるとか。

以上のことから、日常生活におけるマジックアイテムは有用だが、戦闘や研究にはあまり持ち入れない。ということらしい。

「ということは、戦闘用のマジックアイテムで今まで戦っていたパチュリーは相当高位の魔法使いなのか？」

「いいえ違うわ。まあ確かにそこら辺の魔法使いよりは上でしょう

が……。どんな連中が私を襲うかは昨日話したわね？」

「ああ、研究を盗みに来る奴。魔女狩りの連中だっけ」

「ええ、研究を盗みにくる連中も魔法使いなの。派手に私と戦闘したら、魔女狩りに見つかってしまうのは向こうも同じなのよ。つまり、マジックアイテム同士の戦いになるわ。ただ、稀に私が防壁を張っているから大丈夫と過信して、攻撃魔法撃ってくるバカもいるけど……」

「でも防壁が張ってるなら相手が魔法を使っても大丈夫なんじゃないのか？」

「私が張る防壁はマジックアイテムに耐えられても、魔法に耐えられる強度で作られていないわ。と、いうより作る余裕がないの。つまり私が使うマジックアイテム以上の火力がある魔法なんて使われたら外にモロバレなの。まあそういうバカな相手は基本的に下級の魔法使いだから、私のマジックアイテム以上の魔法は使えないのだけど。その上ここは私のテリトリーよ？それだけで私は有利だわ」

成程それなら他の魔法使いより少し強い程度で勝てる。条件が違うのだ。負ける通りが無い。

俺の存在不要じゃないか？とも考えたが、そもそもマジックアイテムも使わずに制圧できる 予定の 俺はそれだけで有用なのだろうし、外に出る時は多少なりとも不利になるから。と自己完結しておく。

「魔女狩りの方は？」

「魔女狩りは基本的に見つかったらアウトね。彼らは対魔法使い戦

闘のプロとでも言ってもいいわ。一人二人なら倒せるけど、下手に逃がすと今度は軍で来るわ」

「それじゃ魔女狩りの連中に襲われたら、手を出さないで逃げたほうがいいのか？」

「基本的にはそうだが、最悪拠点を失うことになるけど命があればどうとでもなるもの。ただ、どうしようもない時は殺すしかないわね。死人に口なし。要は援軍を呼ばなければいいのだから」

殺す。か、まあ殺されるよりマシか。取りあえず覚悟だけはしておこう。俺がこの世界にいる限り、この容姿である限り、他人事ではない。もしも殺せなかつたら援軍を呼ばれて………  
・・殺される。

しかも死ぬのは俺だけではない。パチュリーも巻き添えだ。

最悪、俺は、人を、殺す。

心の中で反芻させる。だが当然実感が湧く訳もない。まあそれは仕方がないだろう人なんぞ殺したこともないのだから。

ふう………これはいくら考えても仕方がないだろう。殺すときは殺す。その後のことは“事”が済んでから考えよう。

「さて、色々脱線したけど説明はこんなものでいいかしら？」

頷いて肯定を現す。



俺もパチュリーもすでに昼食を食べ終えている。

「それじゃさっそくマジックアイテム作成を始めようかしら、しばらく時間かかるから貴方は鍛錬でもしていたら？」

そう言うパチュリーはコートを抱えて自室へと入って行ってしまった。

「うゝむ、確かにすることがない。家事をするにしても、俺の洗濯物は無いし、女の子の衣服を勝手に弄るのも何だ。掃除にしても、音を立ててパチュリーの邪魔をしてしまうかもしれない。食器を洗い終わったら、言われた通り鍛錬でもするか」

朝出来なかった本来の型でもやろう。

そう呟くと俺は洗い物を始めた。

夕方。

「それでマジックアイテムは出来たのか？」

夕食　と、言ってもパチュリーがマジックアイテム作成で疲労だった為に、簡素な物だった　　が終わり後かたづけも済ませてから、目の前で食後のお茶をすすっているパチュリーに聞いた。

「ええ、完成したわ。少し待っていて」

そう言うつとパチュリーは部屋に入り、コートを抱えて出てきた。  
そしてそのコートを俺に手渡す。

「・・・・・・・・・・見た感じには何も変わってないけど」

「ええ、そうね。いいから着てみなさい」

コートを羽織る。別段何かが変わったようには思えない。

「洗面台に行つて鏡を見てみなさい」

言われるがまま、洗面台まで行き鏡を見る。

「・・・・・・・・・・だれ？」

鏡に映っていたのが外人さん。髪型はそのままで茶色。顔立ちも  
鼻が高く少し堀が深い。だが、よく見ると俺の面影がある。

「これなら目立たないでしょ？」

パチュリーが声を掛けてくるが、俺はそれに生返事する。

試にコートを脱いでみた。

鏡には慣れ親しんだ顔が写る。

着る。

外人さんになる。

脱ぐ。

俺。

………お、面白い。

「気に入ってくれたようね」

「ああ、これなら目立たないだろうし、面白いし文句なしだよ」

「そう、それじゃ給料分は働いてね」

「任せとけ」

元々給料【コート】が無くても働かせてもらう予定だったしな。

こうして俺は念願の認識障害コートを手に入れた。だが、次から街を歩くときにパチユリーと腕を組めないのは残念だ。

#### 第四話 デート？/E：認識阻害コート。（後書き）

##### TIPS

パチユリーの貫録。

パチユリーさんが少し八百屋のおばちゃんに囃し立てられたくらいで、赤面するほど初心だったのは若さのせいです。原作は100歳で今作はまだ14歳です。年相応ですかね？

認識阻害魔法。

これは変装以外にも、相手の興味を逸らす効果が付属しています。魔法を掛けた人物を注目されるとアウトですが、大多数の人間がいと目立ちません。路上の石ころみたいなものです。

また本話で海人がもらった認識阻害コートにも少し弱体化していますが、興味を逸らす効果が付属しています。

## 第五話 魔法／使い魔（前書き）

話数が見つらなかったのでプロローグを一話とし、すべて一つずつずらししました。

## 第五話 魔法/使い魔

翌日、朝。

「先生、よろしくお願いします!!!」

朝食後、俺はパチュリーの自室にいた。先日の魔法陣は未だそこにある。魔法陣って何か召喚するイメージがあるけど、何か召喚するのだろうか？

「え、ええ。取りあえずその“先生”っていうのを止めてもらえるかしら？」

俺のテンションに少し引き気味のパチュリーさん。

今からパチュリーに魔法を教えてもらう。故に俺のテンションは仕方がないと思う。だって魔法ですよ？魔法拳士ですよ？男の子の憧れじゃないですか。あ、でも一般的には魔法剣士の方が人気かな？

「分かったよパチュリー。さあ早速始めよう。魔法を教えてください」

「ふう、それじゃ始めるわ。でもその前に、一応魔法の概念だけは頭に入れて置いた方がいいわね。まず魔力は精神力から精製される物にして燃料。それで魔法はイメージ力が大事なの。つまり、魔力という燃料をイメージという着火剤で燃え上がらせて始めて魔法が使えるのよ」

「魔力が精神力から精製されるって、つまり普通の人にも魔

力があつて魔法が使えるのか？」

その場合魔女狩りで人間全てを狩らなくてはいけなくなるんじゃないか？魔法を使わない人でも魔女予備軍とか言つてさ。

「ええ、そうね。ただ私みたいな種族：魔法使いではない、普通の人間では精製される魔力が少なすぎるのよ。だから魔法は使えない。ただ、稀に私たちのような魔力量を修行して手に入れる人間もいるわ」

つまり、普通の人間に魔法は使えるけど、魔力が少なすぎて発動しない。

「それは分かった。けど、種族：魔法使いつてパチュリー人間じゃないの？」

「分類的には人間よ。ただ生まれつき多くの魔力を所持していて、その上原因は不明だけど不老の人間を種族：魔法使いと言うのよ。数は少ないらしいけど、私の母もそうだったわ。遺伝が関係しているのかしら？」

パチュリーも不老？え？実は不老って結構メジャーなの？

「余談はこの辺にしておいて、今度は魔法を実際に使ってみましょう。貴方はやり方を聞くより実践した方が分かりやすいわよね？」

「（コクコク）」

「なら、まず貴方に魔力の感知を教えるわ。魔法を使うには、まず

自分の魔力を感じる必要があるの。目を閉じてリラックスしなさい。今みたいな興奮状態では感じる物も感じないわ」

言われるまま目を閉じリラックスする。今までの異常に高いテンションも魔法習得の為に徐々に収まる。

「そう、そのまま自分の中へと意識を向けて。そうしたら自分の中に何か力の塊みたいのを感じないかしら？」

自分の中に意識を…………。

「あ、コレか？多分それっぽいの…………ある」

「そう、多分それがあなたの魔力よ。それを、そうね…………右手に集中させられるかしら？」

力の塊を…………右手に。

「うまいじゃない。じゃあ次はその魔力を使って魔法を使ってみましょう。右手に魔力を集めたまま、その手から炎を出すイメージ出来るかしら？少しぐらい大げさにイメージした方がいいわ。安心しなさい。防壁が張ってあるから思いっきりイメージしても大丈夫よ」

炎。燃え盛る炎。天より高く、全てを焦がす炎。この程度の魔力じゃ足りないもつと、もつと。

徐々に右手の魔力が量を形を変えていくのが分かる。

「……………驚いた。貴方凄いのね」



パチュリーの驚愕が込められた声に釣られるように、目を開ける。

「・・・・・・・・・・なっ」

俺の手から火が出ている。超小さいライターみたいな火。

「凄いわ、それだけの魔力を使ってこれだけしか火を出せないなんて」

取りあえず、居た堪れない思いで手にある小さな火を握りつぶす。少し熱かった。

それと共に右手に集中していた魔力が拡散した。

「そんなに魔力が籠っていたのか？」

「ええ、本来ならこの家が一瞬で灰になるくらいの魔力が籠っていたわ、私も自身の防壁で防げるか、内心冷や冷やしていたのだけだ.....」

「でも、初めてだったらこんなもんじゃ？」

「いいえ、あれだけの魔力であの火しか出ないと言うのは、ガソリンの充滿した箱に火を投げ入れて、あの程度しか燃えていないのと同じなのよ。逆に才能を感じるわ」

ガソリンに火を放って燃え広がらない訳がない。つまりあり得ない。

「パチュリーさん、正直に答えてください。俺に魔法の才能は？」

「皆無ね。すごいわ、ここまで才能がない人を始めて見た」

パチュリーの言葉が胸に突き刺さる。ガラガラと音を立てて魔法拳士の夢が崩れ落ちていくのが分かった。

「そ、そんな。俺のロマンが……魔法拳士が」

「そんなに落ち込まなくても……あ、そうだわ。貴方に使い魔とかどうかしら？」

パチュリーはあたかも『私、名案思いつきました！』と言わんばかりに手を叩いて言う。

「使い魔？」

「そうよ。これだけの魔力を使わないのは勿体無いと思うの。だから使い魔契約をして、使い魔に魔力を流せばいいのよ。貴方の魔力の無駄も防げて、戦力も上がり、更に雑用まで手に入るなんてお得じゃない？」

「確かにそうだが、そんなに便利なものなら何でパチュリーは召喚してないんだ？」

もつともな意見だと思う。話を聞く限り利点しかない。それなのにそこら辺の魔法使いより上位だと自負するパチュリーが持っていないのは変じゃないか？

「いえ、使い魔は利点ばかりではないの。例えば肉弾戦主体で魔力を必要としない貴方と違って、私は魔法で攻撃するわ。その魔力を使い魔に食われるのだから当然戦力は下がる。ただ、それもマジッ

クアイテム主体で戦っていた私にはあまり関係の無い話だったから、私には召喚する意思はあったのよ……」

そう言つてパチュリーは部屋に未だある魔法陣を指さす。

「召喚しようと決心して、魔法陣描いて、準備万端のときに貴方が現れたのよ。それで結局お流れになってしまっていたの……」

「……そうね丁度いい機会だから今召喚してしましましょう」

「俺がか？」

「いえ、私がよ。別に貴方が召喚しても構わないのだけど、人によつては使い魔を疎ましく感じる人もいるの。だから貴方は私が使い魔を召喚するのを見てゆつくり考えるといいわ」

そう言つとパチュリーは魔法陣の前に立ち、手に持っていた小刀で指を小さく切る。

そこから流れた血を魔法陣に垂らした。

「。。」

それと同時にパチュリーは口の中で小さく呪文を唱える。

すると魔法陣が光を放つ。俺はあまりの眩しさに思わず目を手で覆ってしまった。

少しするとそれは収まり、覆っていた手をどけた。するとさつきまで誰もいなかった魔法陣の上には、片膝を付いて頭を垂れる女の子の存在があつた。

赤色の髪を腰まで伸ばし、黒と赤が基調のタイトな服装で背中と耳の上あたりには悪魔を思い浮かべる羽を持つ、高校生ぐらいの女の子がそこにいた。

「パチュリー・ノーレッジ様ですね？ 使い魔召喚に従い参上いたしました小悪魔です。コアとお呼びください」

「そう、それじゃこれからよろしく頼むわ。コア」

こうして、コアという女の子はパチュリーの使い魔となり、この家で働くことになった。

## 第五話 魔法/使い魔。（後書き）

魔法と魔力の説明を書かせていただきましたが、伝わりませんでしたでしょうか？あまり自信がないですが、これが筆者の限界でございます。

今回コアが出てきましたが、多分コアがシナリオの中核に食い込むことはないんじゃないかと思います。コア好きの方ごめんなさい。

### TIPS

#### 小悪魔。

本話で本人が言ったようにコアは”小”悪魔です。悪魔との違いは力の強さただ一点ですね。

小悪魔は使い魔として召喚され、一人前になったら悪魔として本契約をする。と勝手に妄想しておいます。wikiなどで使い魔の定義などを調べさせていただいたのですが、曖昧な物が多い上に、使い魔とは基本的に猫や鳥などの小動物が主で小悪魔とはいえ悪魔の場合は使役や契約という形のものが多かったです。なので、今回の”悪魔使い魔”の設定は独自の物となっていますのが真に受けないうようお願いします。

#### 登場人物

#### コア

髪の色 赤。

瞳の色 赤。

顔 現代なら街を歩くだけで誰もが振り返るレベルの美少女。自覚あり。

イメージカラー 赤黒。

年齢不詳 見た目は高校生くらい。

種族悪魔。だが経験や力が少ないため”小”悪魔。いつの日か化けるのかもしれない。本来彼女は気まぐれでいたずら好きだが、パチエの使い魔ということもあり、なりを潜めている。

身体能力は高い 海人>コア>>>>>>>パチエである。あくまで身体能力であって戦闘力ではない。

程度の能力はwikiに記載がなかったたのでこの物語でもなしの予定。要望や思いつきで追加する可能性あり。今のところ強いて言うなら『何でもそつなくこなす程度の能力』と言ったところか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5535p/>

---

遙か遠き幻想郷

2010年12月31日03時17分発行